

---

# 平凡女の異世界譚

渚 ノア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平凡女の異世界譚

### 【Nコード】

N2436M

### 【作者名】

渚 ノア

### 【あらすじ】

自宅の玄関開けたら何故か大海原。

これはアレか？テンプレ設定の異世界トリップとかいうやつか？

もうすぐ三十路の平凡女が図太くずる賢く頭を使って異世界で生活しつつ、虎視眈々と元の世界に戻る方法をさがしていく。

とかいうお話になる筈です。

## 平凡女のプロローグ

そこら辺にウヨウヨいる様な、極々普通の生活を送る平凡な人間が、普通に自然に振る舞えば事件なんて起こりません。

ていうか起こそうと思わないと起こりようがありません。

それも性格が事なかれ主義な典型的日本人気質の人間だったりすれば、尚更事件が起こる確率は減る。

たまに事件にあつたら運が悪いつてだけで加害者にしろ被害者にしろ、事故にあつた本人が平凡のカテゴリーから外れる訳じゃない。平凡は何処まで行つても平凡で、常に傍観者。

主役なんて恐れ多くてなれないし、なる機会もない。

どんなに周りが騒がしかろうと物騒であろうと、それが真実。

それが物の道理というもの。

其れが平凡というカテゴリーに属する者の運命とすらいえるだろう。

そしてワタシは胸を張つて言える程、全てが平凡なのだ。

十人並みな容姿に、程々な学歴、交遊関係だつて現代人らしい広く浅いお付き合いで携帯のアドレス帳登録数は200件以上。

仕事場での立場も目立たず騒がず、かといって忘れ去られる程に存在感が無いわけでもないので程々に友好的人間関係と程々に責任ある仕事を任されている。

勿論、警察のご厄介になつた事もない。

そんなワタシは自分のその平凡さに不満はなく、日常生活は至つて平穏で円滑なものであつた。

てな訳で何度も言うが、ワタシは胸を張つて言えるのだ。

そう！ギンの様に

敢えて言おう

ワタシは平凡である！  
と。

な、筈なのに何でワタシこんな事になってんだろう

ワタシは自宅の扉を開けた筈なのに、な、ぜ、か、日差しを反射し  
キラキラと青く輝く広大な水平線を、只々茫然と見つめていた。

## 一話：平凡女の状況確認

取り敢えず、状況を確認してみよう。

ワタシは今日何時もの様に仕事が終わわり、勤め先から自宅まで徒歩五分という激近の道のりを自転車チャリに乗り帰宅した。

そして、部屋の鍵を開けドアを開いた。

よし、ここ迄に何も可笑しな所は無い。

だけど部屋に入った途端、触れていた筈のドアノブの感触が消え失せそれと同時に潮風が鼻腔を掠めた。

ワタシの部屋の芳香剤はピーチアップルの甘い香りを使っている。

それなのに、何故

とか思い部屋をよく見たら、屋内だった筈の部屋はなく広大な大海原となっていた。

その上ワタシは、その海を見下ろすかの様に切り立った崖つぶちに立っている。

景色は嫌に成る程絶景である。

「ワタシ、立ちながら寝てたのかなあ。

そこまでお疲れとか、どんだけ若さないんだろーマジでー。

ハハハ

」

力無く笑い、現実逃避をするがワタシは立ちながら寝るなんて芸当持ち合わせていない。

認めたくない現実を見ない振りして無かった事にする。

でも、そんな事したって事態が何か進む訳じゃない。

「うあゝ、マジかよー」

ワタシの現実逃避タイムは案外短かった。

仕方なく現実を認めた途端、我が身を襲う絶望感に両手で頭をかきむしり、その場に膝を付き何故か正座をしてしまう。

そのまま俯き、視界はベージュ色した地面に占められた。

「仕事どうしょ、てか此処何処だよ。」

ワタシ、部屋に帰れんの？」

只今の所持金三千円。

浜松町から五反田迄のタクシー代くらいしかない。

だけど、あの海の綺麗な青さからいって此処が東京湾とは考えられない。

あの海の色は、昔見た沖縄のコバルトブルーの海によくにていた。

そして、暑い。

長袖Ｔシャツに長袖のカーディガンを羽織っただけなのに、汗が滲む程だ。

少なくとも東京の４月の気候じゃない。

じゃあ沖縄？とか考えたけど、ソレも何処か違和感が残る。

もし海外だったら、もの凄く面倒臭い。

パスポート無いし、所持金少ないし日本語以外は話せない。

英語はネイティブな発音が聞き取れないし、知ってる単語もあまりない。

正しく、八方塞がり。

逃げ場無し。

大使館まで辿り着けるかすら怪しい。

頭に置いた両手を腿の上に置き、目を閉じる。

考えて考えて考える、これからの事を。

困った時程、一回立ち止まり落ち着いて考えろと言う大好きなおばあちゃんの言葉が蘇る。

暫し瞑目し、出た結論は

「第一町人を発見しよう」

というものだった。

とにかくにも、人を見付けないとどうしようもないと気が付いた。だが、いきなり話し掛けるなんて怖い事はしない。

まずは相手に気が付かれ無いようストーカーの如く観察する所から始め、自分との相違を見付けるのだ。

話しはそれからだ。

一先ず出たその結論に納得し、ヨツと立ち上がる。

最後に、と思い結構な高さのある崖から海を除きこんだ。

その瞬間、ドンツという衝撃が全身を襲う。

「だっ駄目です！自殺はっ自殺なんていけませーんっ！！！」

そんな声を背中で聞き、ワタシは結構な高さのあつた崖から落下した。

盛大な水飛沫をあげると共に思った事は、人生って上手くいかない、だった。

## 二話：平凡女の情報収集

「申し訳ありませんでしたーっ！」

そう言つて土下座せんばかりに勢い良く謝るのは、赤髪をした端正な顔をした青年。

つまり、美形外人。

ワタシはソレをずぶ濡れになった髪の水気を絞りながら聞いていた。  
「ま、まさか只単に崖下を覗いているだけなんて思いもよらなかったんです。」

ここは観光の名所であると共に自殺の名所でもあつたんで

「例え自殺志願者だつて、さっきのアンタの行動は問題有りだと思つんだけど」

「っあうう」

青年はワタシが自殺志願者だと思い、止めようとしたがつまづいてしまい、結果的にワタシを海に突き飛ばしたらしい。

どんなドジ子キャラなんだアンタは。  
自然と青年に向ける視線も冷たくなる。

「ワタシが泳ぎが得意だつたから良かったものの、そうじゃなきゃ完璧溺死だったよねえ。」

何？それともアンタ溺れてる人助けられる位泳ぎ得意だったの？

「いえ、火の加護を受けているせいで水の精霊に嫌われているので全く泳げません。」

僕も即効で溺れると思います」

あれ？と気になる発言には即座に、それでいてそれとなく話しを掘り下げます。

「水の精霊に嫌われている奴が何でこんな海っぺりにいるのよ」

「　　偶々潮風にあたりたくなっただんです、僕直ぐそのデリアに住んでるんで」

青年はそう言つて後ろを指差した。

目を細めなくても見える程近くに町があるのが分かった。

「まあデリアなら近いからね」

知ったかぶり此処に極まれり。

取り敢えず、そう言つて頷いておいた。

それにしても、全身ずぶ濡れで服や下着が身体に張り付いて気持ち悪い。

不快感から自分の眉間に皺が寄るのが分かる。

すると青年が目に見えて分かるほど怯えた顔をした。

「すすつ、すみません！

直ぐに服を乾かしますねっ！」

どうやって、というワタシの言葉は発する前に消え失せた。

何故なら青年がワタシに手を翳したかと思つた、次の瞬間には服が乾いていたからだ。

流石に驚いて暫し無言でいたら、青年はその事を何を勘違いしたのか一言二言謝りその場から去ろうとした。

だが、この状況でこのワタシがまさか逃がす筈が無い。

逃げ出そうとする青年の片腕を掴み、そのまま青年の腰辺りに抱き着いた。

青年の「ヒイ」という情けない悲鳴が聞こえてきたが、スルーで結構な長身だった青年に抱き着きながら、精一杯背伸びをして青年に囁いた。

「何逃げようとしてんの？」

ワタシ、アンタのせいで荷物が海の底なんだけど？」

ハツとした様にワタシを振り向く青年にワタシは、飛びっきりの笑顔を見せこう囁いた。

「暫く厄介になるからヨロシクね、青年？」

ワタシはそう囁いた時の青年の顔色が、真っ青を通り越して土気色をしていたのを忘れられない。

勿論、面白かったとかそう言う意味で。

今回分かった事

？青年が美形外人

？青年がヘタレ

？青年が押しに弱い

？青年がドジ子キャラ

？どうやら魔法が存在してるっぽい

取り敢えず今の所はこの位で勘弁してやろう、とワタシは青年の後ろを付いて歩きながらニンマリと笑った。

### 三話：平凡女の自己紹介

街へと続く街道？らしき路を黙々と歩く青年。  
そして、その後ろを同じ様に無言で歩く二人。

もう結構な時間会話がされていない。

だけど気まづいなんて欠片も思いません。

何故ならワタシは今とっても忙しいからです。

例えば路の直ぐ側にある森について考えたり、青年の服装について考えたり（ワタシにとって青年は最早風景の一つと化している）とか色々考える事があるのだ。

森について言えば、植物が青々とよく繁っていた、ていうかジャングル並に鬱蒼としていた。

マジでパない程木がデカイ。

数百メートルは離れているはずなのに、大きいって分かる程デカイって

ここら辺の気候が熱帯と迄はいかないまでも亜熱帯に近い気候のせいだろうと予測した。

雪が積もる様な地域であればあんな大きさの木は育たないし、あんな鬱蒼としたジャングルは中々出来ない。

そんな気候だからか第一印象は暑苦しいな teme 工、な青年の服装は良く見れば涼しげな恰好だった。

マントっぽい黒のフード付き外套を羽織り首元は良く見えないが、外套の下に着ていたのは袖無しの前合わせタイプのシャツっぽい物で生地が薄く薄い麻の様に目の粗い物で出来てある事が分かった。  
そして、足元は足首までのパンツにサンダルだった。

直射日光が当たらない様にしているだろうその服装は、熱帯か亜熱帯地域の気候辺りで着られていそうだ。

とは言え、今の時期が夏だったりすれば今まで予想、ゼーんぶ無駄

に終わるんだけどね。

アハハハ

いや、待てよ直射日光に当たらない様にするくらい日差しが強いつて事は

！

すっぴんだから日焼けする！？

紫外線にやられちゃう？！

ワタシは直ぐにカーディガンを脱ぎ、頭の上に被せ顔に日差しが当たらない様にした。

もうすぐ三十路の微妙なお年頃のワタシとしては、近い未来に必ずくるシミの原因を少しでも排除しなくてはならないのだ。

だったらすっぴん止めるよ、と言われる事が多いがスルーで。

日焼け止めをいつも塗っているから大丈夫、それに職場は近すぎて化粧をしてもあんまり意味がないのだ。

女性のたしなみ、なんて言葉は数年前に忘れ去りました。

しかし、暑い。

本当に、暑い。

何度も言うが、とても暑い。

体感温度で30度以上ありそうだ。

平熱35度以下のワタシにとっては地獄に等しい、その上長袖だし海水が乾いて何か身体がベタベタするし。

そのせいでさっきのずぶ濡れの時より、不快指数が増しているくらいだ。

八つ当たりの意味を込め、その原因の一端を担っている青年の後頭部を睨み付ける。

艶々と輝く赤髪を睨み付けていると、そのキューティクルに更に怒りが湧いてきた。

何なんだ、その髪の艶やかさは！羨ましすぎるぞっ！

「あ、あのー僕に何か御用でしょうか？」

「いや、アンタにじゃなくて、アンタの髪に用が」

「は？」

熱い視線に気付いたらしい青年が後ろを振り向きワタシに話し掛け、ワタシの思わず漏れた本音に首を傾げる青年にワタシは何でも無いと言った。

訝しげな顔をして此方をみる青年。

だが、歩みは止めない。

よっぽど家に帰りたいらしい。

「そう言えばさあ」

「はい何でしょうか」

ワタシはたった今気付いた事実を青年に告げた。

「ワタシ、君の名前知らないよね」

それにワタシの名前も」

「あっ！」

どうやら青年も気付いて無かったらしい。

そりゃああんな出会い方してりゃそんな余裕も暇も無いわ。

ワタシも結構気が動転してたし。

あの場でお別れだったら必要ないだろうけど、これからこの青年のお世話になる予定なのだから名前を知らないと結構不便だ。

青年が立ち止まりちゃんとワタシに向かいあった。

「僕の名前はクルデイルド＝ウェルディと言います。クルドって呼んで下さい。」

貴女のお名前を伺っても良いですか？」

そう言つて柔らかく微笑む青年の顔を見上げ、ちよつと見惚れた事は秘密だ。

「ワタシは、那賀木祭 いや、マツリ」ナガキつて名前だよ。

ああ、出来ればナガキつて呼んで貰えると嬉しいな」

ワタシも笑顔を見せ名前を告げたが、青年との間に明確な線を引く事を忘れ無かつた。

出会つて数十分

やっと自己紹介が出来ました。

#### 四話：平凡女のお家拝見

「え、コレが自宅？」

ワタシが戸惑いながら目の前にある物を指差しそう言つと、青年はソレを何か勘違いしたらしく申し訳なさそうな顔をした。

「はあ、小さい家ですみません。  
でも必要最低限の物は揃つてるんで、安心して下さい」

ワタシは目の前に鎮座する、サザエさん一家が二三家族は入りそうなくらい大きな二階建築の家を見上げたため息を一つ溢した。

コレを小さいって言えるアンタにワタシは安心出来ないんだけど

此処に来る途中あつた民家とこの家を比較し、内心でそう突っ込みを入れておいた。

クルド君の家は海寄りの郊外にあつたので街中を横断する事は無かつたが、街が段々近づくにつれチラホラと畑らしき物と民家らしき物が見えてきていた。

そこで見た民家は高さや広さは有りそうだったが、総じて平屋造りで断じてこんな二階建築では無かつた。

稀に二階建てを見かけたがそういった時は、大体軒先に絵が書かれた看板が吊るされていたので何か商売事をしているのだと勝手に辺りを付けた。

地球では昔、何処に行つても農家の人達は余り良い生活をしていない事が多かったらしい。

生かさず殺さずが基本で上から搾取されてきた時代も長かつたと祖母から聞いた事がある。

昔のお偉いさんも流石に農家の人達がいないと生きていけないという自覚はあったらしい。

必要最低限生きれる位の生活はできたと聞くから、この世界の最低標準を農家の人達と考えるのなら、街中の建物も良くてあの稀にあった商店らしき物位ではないかと思った。

それらの事から考えると、やはりこの家は大きかった。広かった。

そして

・ ・ ・ ・ ・

人がいなかった。

重そうな扉を開け青年に付いて中に一歩足を踏み入れれば、そこは驚く程人氣が無く閑散としていた。

外から見た窓の数は二十近くあり部屋数も同程度あると考えたら、それを維持する為には結構な人出が必要な筈だ。

だがしかし、この家にはそういった人のいる気配が全くせず、不気味な程静かで薄暗かった。

けれど取り敢えず、そのまま中にはいった。

クルド君はコチラへどうぞ、と言ひ広い内玄関？に幾つかあった扉の一つを開いた。

扉を片手で開いたまま待つクルド君に一言礼を言い、ワタシは進め

られるまま中に入り部屋を見て少しばかり安心した。

ワタシが入った部屋はいわゆる台所っぽい所だったからだ。

ダイニングキッチンのように台所を仕切るカウンターがあり、その前には対面式で食べる所であるテーブルが置かれていた。

広さは中央に十人掛けのテーブルを置き、それでもテーブルの周りは人が三四人横に並んで歩けそうな位広い。

初めて来る客を最初に連れて来る所が食堂って、常識的に問題有りなんじゃ　とか思っていたのが顔に出ていたらしい。

クルド君が頭を掻きつつ謝ってきた。

「すみません、こんな所に案内して。」

でも、他の部屋って使ってないもので　　

「いや、別に大丈夫だよ。そんな気取った部屋とか案内されても、ワタシ寛げないから。」

だから気にしないでよ、クルド君」

ワタシがそう言うのと、クルド君は何故か微妙な表情をした。

取り敢えず、スルーで。

気にしてたって仕方がない。

ワタシがテーブルの何処に座ろうか悩んでいると、クルド君が入り口近くの椅子を引いてくれた。

又一つ礼を言い、素直にそこへと座る。

「ちょっと待っててくださいね」

クルド君はそう言うって台所へと向かって行った。

クルド君の背中が台所に見え水音がした頃、ワタシは力無く項垂れテーブルに額を付けた。

冷たいテーブルの温度に少しばかり癒される。

「　マジで、疲れた」

久しぶりに全力で被服水泳をして根こそぎ体力を持ってかれた上に、その後も知らない場所で少しでも何か知ろうと頭を使ってきた。仕事後にこの運動量と頭脳労働はかなりキツイ。

年齢的な物もあるが日頃使わない身体と脳味噌が酷使され、悲鳴を上げている。

その証拠に椅子に座った途端、両手両足ていうか全身がジワンジワンしている。

やっと取れた休息に全身が喜びの声をあげているのだ。

そして、瞼も酷く重く開けているのが難しくなってきた。

段々と暗くなる視界と思考にワタシは逆らわず、逆らおうともせず、遂には全てが闇に染まった。

## 五話：平凡女の目覚め

暗闇で、慟哭が聴こえた。

その声音は、聴く者全てが胸を締め付けられる程悲哀に満ち満ちていた。

女性なのか男性なのかは分からない。

光すら射さない暗闇の中で、絶える事無く聴こえる嗚咽混じりの慟哭。

手を指し伸ばす事を躊躇う程に、その嘆きは、深い。

暗闇で何も見えない筈なのに、何故か涙を流しているのがわかる。

聴こえる筈の無い涙を流す音が聴こえた。

ああ 泣かないで、泣いちゃ駄目

大丈夫、大丈夫だから

慰めにもならない慰めの言葉をかけるが、嘆きが深すぎて言葉は届かない。

誰か、誰か助けてあげて。

あんなにも、哀しい嘆きが深い人を。

段々と光が指し暗闇が薄れ始め、慟哭も掠れ聴きづらくなってきた。胸を締め付ける様な嘆きは変わらないままで

ま、眩しい、あれ？ワタシカーテン開けてたっけ。

余りにも眩しくてベッドで寝ながら、手が届く筈のカーテンに手を伸ばした。

だが、幾度触っても有るのは木製の感触のみだった。

未だ四分の三位寝ている頭だが、そこは不思議に思った。

だってワタシのベッドはパイプベッドで木製の物なんて何も無く、  
ベッドの側には窓とカーテンしかないからだ。

「っ！！！」

そこまで思い出した瞬間、ガバツと跳ね起きた。

今までであった眠気は跳ね起きたその時に吹き飛び、緊張と焦り等々  
からか動悸が激しくなり自分の動悸が煩い程よく聞こえてきた。

ベッドの上で中腰になり周りを忙しく見渡し、自分の部屋では無  
い事を確認した。

冷や汗が背中を伝う。

ベタつく肌と服に不快感を感じ、髪に手をやれば仄かに磯臭かった。

「夢オチ希望だったんだけど、やっぱりそこまで上手い事いらない  
か」

いや、諦めち

やいけない。

実はこのベッドしか置いて無くてカーテンすらないっていう部屋に  
いるのが夢で、又寝たら今度は自分の部屋でちゃんと起きるってい  
うオチに」

コンコン

扉をノックする音が聞こえた。

「おっおはようございませう、起きて、ますか？」

ワタシの現実逃避はクルド君によって終止符が打たれた。

ガックシと肩を落とし四つん這いになって凹み、力無く呻く様に入って良いよと答えるた。

そんなワタシを見て部屋に入ってきたクルド君が狼狽えていた。

「うええっ!？」

なっなんでそんないかにも落ち込んでます、的な感じで落ち込んでるんですか？えっ、まだ朝ですよ爽やかな朝なんですっよ?!」

クルド君の挙動不審振りに夢オチが絶対に無いことを再認識してしまった。

このヘタレっぷりに美形さが台無しになっている。

何とも残念な感じの青年だ。

性格良さげで金持ちそうで、顔だって良いのに全くときめかない。

優しげな顔立ちの端正な作りをしたクルド君の美形さは、日本で生活してたらあまり見られないし馴染みがない。

それなのに、ときめかない。

やはり、それだけに余裕が無いって事だろうか。

もう一度クルド君の顔をじっくり眺め、ため息を吐いた。

「ぼっ僕の顔見てため息吐かなくてもいいじゃないですかっ!」

クルド君のごもつともな発言は取り敢えず、スルーで。

四つん這いから移動し、ベッドの端に座り直す。

「クルド君おはよう」

「あつハイ、おはようございます。  
って、僕の発言無視ですかっ！」

「所でさ、ワタシをこの部屋に寝かせてくれたのってクルド君？  
だったらありがとね」

クルド君の発言をフルシカトし、そう問うと若干凹みながらも答え  
てくれた。

「また無視された　　。」

はあ僕が運びましたよ、食堂には寝れる場所ありませんでしたし。  
でも、さっきこの部屋にカーテンが無いのを思い出しまして、それ  
に起きたら違う部屋だっていう理由を説明したかったので」

「で、この部屋に来て今に至るって訳なんだね。」

ヨツと声を出しベッドから下り、クルド君をヒタと見据えた。

「取り敢えずさ、申し訳無いんだけど　　」

ゴギユツギユキユツキキュルキユ

何かの鳴き声の様な大きな音が部屋に響き渡った。

「こんな感じで餓えてるんで、何か食べる物下さい。

お願いします」

ワタシはペコリと頭を下げ、鳴き声の震源地であった自分の腹をさ  
すり擦りそう言った。

女の自尊心なんて、異世界で気にしてたら生きていけんわ！

## 六話：平凡女の教育的指導

コトツと、目の前に置かれた物に目が釘付けになる。

口元を引きつらせ、目の前にある物を指差し、クルド君に尋ねた。

「コレ、何て名前なん？」

「さあ？」

「いや さあつて、いつも食べてる物なんじゃ無いの？」

首を傾げるクルド君は本当に知らなさそうに見えた。

「僕あんまり食べ物に興味がないんで、知らないんです。」

コレも通いの家政婦さんが買い置きしてくれてた物なんで、食べ物だつて事以外は何も知ら、なくて

ええと、なんでそんな顔して僕を見るんですか？」

クルド君は自分の発言を聞き、愕然とするワタシを見ても理由は分からなかったらしい。

ワタシは、分からないのが分からない。

クルド君に向けていた視線を、先程まで見ていた物に戻す。

コトツと置かれたそれは、木製のスープ皿に入った

『青色』の

『物体X』だった。

皿の上に乗っていた物体Xは今にも踊りだしそうな形状をし、皿からはみ出そうな勢いの『ナニ』かであった。

（イヤイヤイヤイヤ！オカシイだろ、オカシ過ぎだろコレ！色と形が、食べ物のカテゴリーに入って無いってマジで！）

物体Xは形状や色だけでなく匂いも救い様が無かった。

口に入れる前から周囲に漂う異臭はまるで、夏に生ゴミを数日放置

したかの様な匂いを発していた。

つまり、食べ物の匂いをしていません。

ていうか、デンジャーでハザードな匂いでありながら食欲を悪い意味で刺激する匂いだと思います。

ワタシの本能が、コレを食べちゃいけないって警鐘鳴らしまくって煩い位です。

勇気を出して銀色のスプーンでスープをすくい、目の前にまで持ってきたが身体がそれ以上の接近を拒絶する。

ホカホカと湯気をたてる『青色』の『物体X』。

色と形状と匂いさえマトモであれば美味しそうなのに、と残念に思う。

いや、そんだけ違ってたら最早違う物か

スプーンをゆつくりと皿に戻し、向かい側の席に座ったクルド君をチラッと見た。

クルド君は何故か、期待でキラキラとした瞳で此方を見ていた。

クルド君の前にも同じ様な皿に鎮座している『青色』の『物体X』

があったが、クルド君はスプーンを持つとせずつ胸の前で手を合わせていた。

所謂、夢見る乙女のポーズだ。

違和感が無い事に少ばかりイラツとした。

ワタシがやるより様になっているのは、ソレをやっているのが美青年だからだろう。

ケツこの美形が、と内心で毒吐くが内容が毒になっていない。

「僕、初めて人に料理を作ったんですけど、何かドキドキしますね」

相変わらずキラキラした眼差しに照れ臭そうな表情がプラスされ、まるで幼子の様に純粋なソレを見たワタシは食べないという選択肢が無くなってしまった。

考えても見て欲しい。

この状況で、『あ、ゴメン。コレ不味そうだから違う物ある?』何

て言えるであろうか。

イヤ、言えない。

そんな事言える奴は、KYなだけで無く人でなしの鬼畜野郎だ。

「あ、うっうん。じゃあいただくね」

スプーンで『物体X』の腕っぽい物とスープをすくい、心の中でいただきますと呟きスプーンを口に入れた。

内心で、遺言状を残さなかった事を後悔しながら。

「っ！！！」

口に入れた瞬間広がる激烈な生臭さと洗剤っぽい味。

思わず嚙んでしまった『物体X』から染みでる、青臭さとエグ味、渋味苦味。

早く呑み込み口の中から無くしてしまいたいけれど、喉が食道が嚥下を拒否している。

生理的な涙が出てきて目の前がボヤけてきた。

スプーンを口からガツと引き抜き、お茶らしき物が入っていた木製のコップを掴むと一気に煽る。

何とか全て飲み込むが、口の中にはまだ生臭さ洗剤臭さエグ味渋味苦味。

涙目のまま恨めしげにクルド君を見れば、怪訝な顔をしていた。

「あの」

「クルド君」

恐らく、感想を求めたのであろうクルド君の言葉を遮った。

「味見ってした？」

「へっ？味見、ですか？」

ソレって何ですか？」

又しても分かっただけなさそうなクルド君に、無駄な事を言ったとちょっと後悔した。

「取り敢えず、クルド君も食べてよ」

話しはそれからだと言わんばかりのワタシに、クルド君は首を傾げるが素直にワタシの言葉に従った。

「はあ、それではお言葉に甘えて            っ！！！」

スープを口に含んだ途端顔を壮絶に歪め、ワタシと同じ様に飲み物を一気に飲みするクルド君。

その光景を眺め異世界でも味覚は一緒な事に安堵し、多少は溜飲が下がった。

美味しい物のみならず、不味い物も皆で共有したくなるのはどうしてだろう。

「さて、謝罪はそんな物で良いとして言い訳でも聞こうか            ねえ、クルド君？」

涙ながらにひたすらワタシへ『スミマセン』『ごめんなさい』『申し訳ありません』と、ワタシの足元に這いつくばって謝り続けるクルド君を冷めた眼差しで見下ろしそう言った。

クルド君に世話になる立場のワタシだが、クルド君とワタシの上下関係は逆転しているから問題は無い。

涙目で此方を見上げるクルド君と目が合うと、小さく悲鳴をあげ顔を青ざめさせていた。

結構失礼な奴だな、コイツ。

「え、あ、あのですね、買い置きされた物はあつたんですよ」

「            」

無言。

「でっでも、量が少なかったんで近くにあったグリアドネ草を隠し味と嵩まし代わりでいれたんです！」

「」

又無言。

「うう、それで味が薄くなったかと思って手近にあった調味料を入れて、今に至る次第です」

「因みに、グリアドネ草っていうのは何？」

返事が貰えたのが嬉しかったらしいクルド君は、満面の笑みで皿の上に鎮座している『物体X』を指差した。

「ソレです！」

その大きな固まりがそうです」

ビキッと口元が引きつった。

「へー、グリアドネ草の用途と効能とか知ってる？」

クルド君はハイっ勿論です！と答え、教えてくれた。

「グリアドネ草は薬草の一種で、魔法薬を作る時に良く用いられます。」

効能や効果としては、滋養強壮、疲労回復等があり少量で効果的に結果がでる、中々強い薬草ですよ。

ただ、特有の味がするので魔法薬を作る時は、量に気を付けないと飲めなくなるんですよ。」

あっ！それと多量に摂取すると、たまに心の臓が止まるらしいです」  
又々満面の笑みで答えるクルド君に、ワタシは自分の中で何かが千切れる音が聞こえた。

ゴスツ、ガツツ！

「ウゲツツ！？」

「心臓止まる様なモン人に喰わせるなっ！！！」

ワタシの拳骨を頭上に喰らい、その勢いで床に顔を打ち付けたクルド君へ怒鳴るワタシの心の叫び。

だが、まだワタシの心の叫びは止まらない。

床で呻いているクルド君の胸ぐらを両手で掴み、無理矢理引き起こしギロツと睨み付けた。

「大体ね！あのグリドルだかグリとグラだから知らないけど、全然隠されてないからっ！！！」

というか、存在主張し過ぎ最早主役だからアレっ！

隠し味っていうのは目で見て分かんないから隠し味っていうのっ！  
そんで人様に出すんだったら事前に自分で味を確かめなさい、他人で毒見させるんじゃないっ！！！」

分かった？と問えばクルド君が蒼白な顔色で、何度も何度も頷いていた。

それを確認しクルド君をぺいっとな床に投げた。

「まあ？アレがわざとなら、ワタシって相当嫌われてるんだって事になるから？」

会って2日でそんなに嫌われるのは、ちょっとショック 「嫌ってなんかいませんっ！」 なんだけど？！」

凄い勢いでワタシの言葉を否定してくれたクルド君は必死になって言葉を続けた。

「確かに、出会いはちょっとアレでしたけど、でも、でもナーガさんを嫌うだなんて事はありませんっ！」

真剣な眼差しでワタシを見つめているクルド君は、ナガキと発音できなくてワタシの事をナーガと呼んでいる。

日本人だってちょっと発音しづらいワタシの名字は、名前と相まっ

て中々に忘れにくい名前だった。

小さい頃は良く苛められたが、返り討ちし続けたらいつの間にか苛められなくなつた。

因みに、母は那賀木愛で妹は那賀木美智、弟は那賀木零という。  
家族揃つてそんな名前である。

友人からは、楽しいけど疲れそうな名前だと言われている。とまあ、ワタシの名前の話は置いていて。

「ああはあ、それはありがと。

大丈夫だよ、本気で嫌われたなんて思つちやいないから。」

クルド君の勢いに押されそうは言つたが、疑問は残つた。

会つて2日で何故そんなにも好意を抱けるのだらう。

言つちやなんだが、ワタシは不審者だ。その上、馴れ馴れしくつて図々しい女だとも自覚しているし、そう相手に思われているとも考えていた。

だがしかし、クルド君の眼差しにはそういった不快感の様な物は感じられなかった。

普通ならこんなに偉そうにしている不審者に、警戒心は抱いても好意なんて抱かない筈だ。

それが、何故。

そんな思いが表情に現れてしまつていた様で、クルド君がまた何やら誤解し泣きそうな顔をしていた。

捨て犬の様な眼差しで見つめられると、罪悪感に駆られてしまうのは何でなんだろう

ジツと涙目で見上げてくるクルド君を見下ろし、ワタシは諦めのため息を吐いた。

クルド君はその事に又々悪い方へ勘違いしたらしく、シュンツとして視線を床に下ろした。

ワタシはスツと手を出し、さっき殴ってしまったクルド君の頭部を慰める様に撫でた。

「でも、まあありがとね」  
「っ?！」

ガバツと頭を上げ、驚いているクルド君を見下ろし苦笑を浮かべた。  
慰める様に撫でる手は止めない。

「だって、ワタシの為に作ってくれたんでしょ？」

「は、はい」

「だから、ありがとって言ってるんだよ。

結果的に食べられる物じゃなかったけど、ワタシの為に頑張ってくれたんだからお礼を言うのは当たり前でしょ？」

違う?と問えば暫しぼおとした後、クルド君は勢い良く頭を横に振った。

「おっお礼なんてっ、お礼なんて頂ける物じゃ無かったんで

で、でも、こちらこそありがとうございます！」

そんな風に言って貰えて、とっても嬉しいですっ!」

落ち込んだ様な雰囲気から一変、喜色満面の笑顔でワタシを見上げるクルド君。

その素直さが可愛く思えワタシも微笑みながら、頭を撫でた。  
暫しニコニコと微笑みあっていた

が、しかし

ワタシは撫でていた手（プラスもう片手）で頭を両側から掴み、  
握り潰すつもりで力を込めた。

顔は微笑んだままで。

握力45kgのワタシを舐めちゃいけない。

スチール缶は片手でベコベコに出来るし、バスケットボールだって  
片手で振り回せるのだ。

「だ、け、ど、あの食材への冒涇は忘れないから、覚悟しとけ  
よ?。」

「アダッ！結局僕の事全く許して無いって事ですよねっ！？」

アダダダッ！ナーガさんこそ僕の事嫌ってるじゃないですか！

「ーっ！ーっ！」

食堂からは、十数分間クルド君の嗚咽混じりの悲鳴が聞こえていた。

嫌ってないですよ？

イラッとはしたけど。

これはただの、ちょっぴり愛の籠った嫉なんです。

## 六話：平凡女の教育的指導（後書き）

何処までいってもギャグで申し訳ないです。

## 七話：平凡女のお仕事

家捜し状態でなんとかそのまま食べられる物を探し出し、腹五分目程度になったお腹を擦った。

味と食べ物のは正体は取り敢えず二次三の次である。

「さて、胃も落ち着いた事だしお話してもしようか。  
ねえ、クルド君？」

「」

「なにその涙目、ワタシ何かした？」

「」

「だから、なんで涙目なの？」

次いでに言えば、涙目で睨まれたって全然怖く無いんですけど？」

逆に可愛らしいとすら感じるよ？

「もう良いです」

フィツと顔を反らすクルド君は片手でコメカミを擦っていた。

先程やった頭を鷲掴みから梅干しの刑への移行が、思った以上に効いたらしい。

ヘタレだけでなくモヤシっ子要素まであるのかこの子は、と少々呆れた。

だが、良く良く思い返してみるとあの刑は成人した弟ですら半泣きにさせてしまう代物である。

だからまあ仕方ないかと思い直した。

「とにかく、話しを続けるけど良いよね。うん、良いって事で。はい、話し進めるよー」

「あ、あのー僕の意見全く聞いて無いようなんですけ」「それで今後の事なだけだね」「ハイスミマセンナンデモナイデス（泣）」

悲壮感を漂わせ始めたクルド君。  
スルーで。

「ワタシさあ、お金も仕事も無いしこの世界の人間でもないじゃん？住む所はクルド君の所で良いから考え無いとしても、それにしたって色々問題有りなのよ」

ワタシの言葉にフンフンと相槌を打つクルド君。

「ええ、ハイ、そうですね。僕の家に滞在するのが前提なのが微妙な気分ですが、そ、お で っ!？」

クルド君の相槌と言葉が途中で止まり、表情すらも固まっていた。案外人の話しを良く聞く子の様だ。

固まるクルド君に更に追い討ちをかける。

「だ、か、ら、ワタシは仕事とお金が無くて、『この世界の人間』でもないんだって」

「えっ？、うえっ え」

エッ!？」

数瞬間を置いてやっとこさ理解したクルド君に、畳み掛ける様に話し掛ける。

「とにかくそんな訳でワタシ結構切羽詰まってるのよ、頼みの綱はクルド君だけで他には全く無し。ワタシの此れからはクルド君にかかっていると書いても過言じゃないって事。会ったばかりの君にこ

んな事頼むのなんて、淒く申し訳無いんだけどさ。

まあワタシと知り合ったのが運のつきって事で諦めてよね。アッハッハッ。

さてさて、それでワタシの今後なんだけどさ、取り敢えずこの世界の常識を学びつつクルド君に寄生するっていう案が一番有力なんだけど、どう？ ああうん聞いてみただけだから気にしないで、まあ大丈夫って事で。 んでも世話になるだけじゃ流石にアレだから、ここに慣れたら食事とか家事をするよ。

クルド君は住み込みの家政婦でも雇ったと思ってて。

とかいう感じでどう？

「えっ！？ あっハイ?!」

「はい、ありがとう。じゃあこれでワタシはクルド君の住み込み家政婦って事で、けってーい」

「えっ、いや 今のはちがつ」

「そうだ、クルド君。他の家政婦さんてどのくらいの頻度で来てるの？」

「はっ？ あ、あの 三日ごとでお願いしてますけ」

「それじゃあその人にこの世界の家事とか習うよ。」

「一般常識とかはクルド君に頼んでも良い？」

反論や意見を求めず考える暇も与えず、立て板に水論法で話し続け最後だけちゃんと問い掛けた。

流されやすいお人好し体質の人にはうってつけな方法である。

クルド君の一般常識は結構怪しいと思うが、背に腹は代えられない。

「え、え」と『頼んでもいい?』と言われても、内容に色々と疑問が残るんで素直に頷けないんですが

「気にしないで。」

気にしたら負けだよ、クルド君。

で、お返事は？」

クルド君は暫し躊躇った跡、首を傾げつつ頷いた。

「よ、よろしくお願いします？」

「そこで何で首を傾げて疑問系なのかが気になるけど、敢えて今は言わないよ」

「イヤ言ってますよね、ソレ」

「でも、頷いてくれてありがとう。」

今日からクルド君はワタシの雇い主で先生だね、コレからヨロシク。」

契約書とか労働条件とか賃金とかは後で決めようか」

「あつハイ、こちらこそ宜しくお願いします。」

にしても、いきなり生々しい話しになるんですね」

ああ、流されてる流されてるよクルド君。

ここまで上手くいくと逆に君の事が心配なってきたよ、お姉さんは

クルド君に後半を呆れた様な口調で言われ、内心慚然とする。

働く上では当たり前に必要な事を言っただけなのだが、生々しいと言われるとは思わなかったからだ。

お金と労働問題はなあなあで曖昧に済ませていると、後々ややこしい事になると相場が決まっているのだ。

親しき仲にも礼儀あり。

クルド君と言うほど親しくは無いが、これからの事を考えれば早いに決めてしまえば面倒は少ない。

金の切れ目が縁の切れ目になったら目もあてられない。

だが、問題が一つ。

ワタシってこの世界の文字、読めるのか？

「ワタシ的には現実的、と言って欲しいけどね。」

あ、そう言えば家政婦さんって何日前に来た？」

「確か、二日前に来たんで明日来ると思います。」

「じゃあ、今日の昼と夜は外食だね」

さっき家搜ししたキッチンを横目で見つっそう言えば、多少なりとも自分の常識の無さを自覚したクルド君が気まずそうに頷いていた。まだ探せば何かしら出てくるだろうが見つけたら見つけたで判断するのに時間がかかるし、空腹時にそんな手間暇かけていたらキレる。というか、実際にさっきキレかけて棚を殴り倒したくなった。空腹って老若男女問わず気が短くなるモンなんですよ。

「ワタシの仕事は決まったから良いとして、クルド君はどんな仕事してんの？」

「いうか、今日お休みなの？」

「えっ、え〜とですね、今ちよつと長期休暇中なんです。」

仕事内容とかは、街や国の保安や魔法研究が主ですね」

クルド君の話を聞いて少々驚いた。

正直な話し、クルド君の事をワタシは良いとこのボンボンでニートな奴だと思っていたからだ。

だから仕事の話しを振りはしたが、そんな答えが帰ってくるとは考えてすらおらず驚いたのだ。

「何でそんな驚いた顔をしてるんですか？」

しまった、驚きが顔に出てしまっていたらしい。

いけないいけない、と顔を揉みほぐし気にしないでといった。

訝しげな顔をするクルド君に片手を振った。

「イヤイヤ、まだ若いのに働いてるなんて偉いなあって思ったただけだから」

「まだ若いって、ナーガさん僕とそんな変わらない位の年なのに」

若干呆れた様にそう言われ、アレ？と首を傾げる。

「クルド君て今何歳？」

「僕ですか？」

今年で19になりますけど、ナーガさんその位ですよ？」

「はあ？」

ワタシ29だけど」

「あ、やっぱり僕と同じで19だったんですね」

「いや、だから29歳だつて。」

分かる？にじゅうときゆうさい、なのよワタシはね！」

分からせる為、噛んで含ませる様にゆっくりとそう告げた。

「はっ？、えっ エ、エッ！？」

少しタレ目で大きな目を更に大きく見開いたクルド君は、驚愕だったらしい事実には驚いていた。

基本的に日本人は外国で幼く見られがちだが、ここでもその傾向が有るらしい。年相応な顔をしている筈のワタシがここでは未成年に見えるとは

異文化交流ならぬ異世界交流は、色々常識が違っていて面白い。

「そんなに驚かなくても」

「えっ、だつただつたつて、29つて30の一つ前の29ですよねっ！？来年きたら30になる29の29の事たら30になる29の29の事ですよねっ！？」

「あんまり年の事、連呼しないで欲しいんだけど」

クルド君の発言にピクツと口元が引きつる。

だが、クルド君はワタシの話を聞いておらず、その後もずっと29が29で29をとか何とか呟いていた。ビキツと口元だけでなく顔全体が引きつってきた。

それでも何とか自分を押さえていたが、次のクルド君がした発言により全てが決壊した。

「 案外、お年を召した方だったんですね」  
ワタシは満面の笑みを浮かべ、一つ頷いた。

うん、クルド君梅干しの刑決定。

## 七話：平凡女のお仕事（後書き）

お久しぶりの更新です。感想くださった方ありがとうございました。  
ヘタレクルド君に需要があってホッとしています。

## 平凡女のお買い物（前書き）

大変お待たせしました。でも、話しはほとんど進んで無いです、すみません（泣）

## 平凡女のお買い物

「うおおおお、只今大変込み合っております、って感じだねえ」

「そんな漢らしい声出して感心しないでくださいよ、ナーガさん。」

まあ、気持ちは分からなくも無いですけど」

前半は呆れを含み、後半は頷いてるクルド君は眼前に広がる光景を見渡し頷いていた。

この光景は見慣れている筈の現地人でもそう思ってしまうのだろう。広い道幅が半分になる程ひしめく様に建てならぶ露天。

あまりの混雑振りに人とすれ違う度ぶつかる肩。

あちこちからひっきりなしに聞こえる客引きの声は、とても元気で威勢が良い。

「このデリアは王都から離れてはいますけど、インダストリア国で二番目に栄えてる都市なんです。」

だから、交易も盛んでいつもこんな感じなんですよね」

「へー　ここってインダストリアって名前だったのね」

「知らないんですか　って、知る訳ありませんでしたね。スミマセン」

クルド君からの説明に素直な感想を述べれば、なんでか謝っているクルド君。

とりあえずスルーで。

ワタシは今とても忙しいのでクルド君に構ってられないのだ。

只今のワタシはクルド君から借りた『何故か』サイズの丁度よい外套を纏い、軒先や露天に並ぶ異世界情緒溢れる様々な商品眺めている。見た事のない物ばかりでとても目移りしてしまう（中には視界

に入れたく無い様な物もあつたけれど、

クルド君に連れて行かれた街の中はゲームとかでも見た様な、基本的に西洋感溢れる作りと材質だった。

そんな街中を見ても新鮮な感じはあれど、驚きはあまり無かった。がしかし！すれ違う街人達を見て驚いた。

皆が皆、クルド君よりも高身長だったのだ。

勿論、男女問わずにである。

さつきから、すれ違う人達のみぞおちしか見ていない様な気がする

まばらに獣面の人や、獣耳、尻尾、背中に羽根を生やしている人なんかも見つけた。

うん、正に異世界。

進化の過程が全く違うね！

街の中の建物は基本的に二階建てで、敷地面積もワタシの常識の範囲内に見える。

その事から、やはりクルド君の一般常識が当てにならない事が分かった。

試しに、と思い果物や野菜らしき物の名前をクルド君に聞くが逆に「何だと思えますか？」と聞かれる始末だ。

質問に質問で返すなっ！

ワタシが分かる訳ないだろがっ！！！！

と突っ込みたい所だけど、それは聞いたワタシが悪かったと思い我慢しておいた。

ああ、ワタシって大人。

質問に質問で返された後は無言になりクルド君の後ろを黙々と大人しくついて歩くワタシ。

ただ、視線だけはキョロキョロと忙しなく稼働中である。

ワタシがこんな町中にいるのには理由がある。

とはいってもそう大層な理由ではない。

家に居ても情報が無さすぎて聞きたい事が纏まらないし、どうせ夕食街で食べるならもう街に行っても良いんじゃない？

「つかワタシの生活必需品買わなきゃじゃね？」

「的なワタシの独断で街に行く事が決まった。」

「取り敢えず、磯臭い自分の身体は置いておく事にして、異世界知識と異世界生活で必要な物を入手する事に至った。」

「この世界に馴染み過ぎて元の世界に戻れない、とかいう無くもない設定がワタシにもあてはまるかどうか分からないが生きる為にはある程度一般知識が必要となる。」

「もし帰れるかも知れない事態になった場合、知識が無かったらそのチャンスを失うかもしれないという設定があるかもしれない。」  
「それに、帰る帰れない以前に死んでしまったらそれでお仕舞い、ジ・エンド、セ・フィニだ。」

「だからワタシは知識を貪欲に欲しがる、『知らない事』があるのが怖いから。」

「それが『帰れない事』に繋がるかもしれないから」

「と、突然クルド君があるお店の前で立ち止まった。」

「その店先には色とりどりの生地や服らしき物が並べられており、丸い看板の真ん中には一反木綿 いや違った、下底が巻物っぽいのに巻かれた白色の長方形が描かれていた。」

「絵の意味が分からないので看板は暫定で一反木綿と呼ぶ事にするが、店にある品物から見てこの暫定一反木綿は恐らく服飾系に使われる看板なのだろう。」

「ナীগさん、ここは生地屋で服とか小物とかも扱ってるのでどうぞ」

「はあ、どうも。」

「で？」

「いえ　っ、あの、だから　どうぞ？」

「ああうん、だから　それで、ワタシ一人でどうしろと？」

「ええっ？どうしろと　　って、着る物とか　を、選んで頂けたら  
　　と思ひまして。」

ええっ！もしかして、僕も一緒に行かなきゃなんですかっ！？」

「は？当たり前でしょ、何言ってるのさ。  
ハイ行くよー」

「　えっ、ええっ！！！」

ドナドナよろしくクルド君の胸ぐら掴んで、ズルズルと店へ引きず  
　　つて行く。

自分の推測通りのお店だったのは良いけれど、どうぞ　　と言われ  
　　てもワタシには先立つものが無いしこの世界の常識も無い。  
　　なので、買い物する時に現地人は必須となる。

この際『是が非でも女物！』とかいう贅沢は言わないので、せめて  
　　せめて磯臭くない服を着たい。

「ハイハイ、ご主人様お静かに！。周りの注目集めまくりですよー」

「じっ　　じっしゅっ　　！？」

ごちゃごちゃ煩いクルド君を黙らす為、敢えてへりくだってみれば  
　　赤面しどもるクルド君。

何故！？

まあ突っ込むのもメンドイので、スルー決定。

大人しくなっただけだよ。

ワタシはクルド君が大人しくなったのをこれ幸いと、一反木綿店へと引きずりこんだ。

## 平凡女のお勉強（前書き）

お久しぶりです。そして、今回長いです。色々スンマセンです。  
お金の単位修正します。

## 平凡女のお勉強

「だーから、悪かったってゴメンって言ってんじゃんクルド君」

「」

無言。

「まさかあんなになるなんて思わなくってさ、ほんつっとゴメン。ゴメンナサイ」

「」

又も、無言。

ここは先程の生地屋さんから近い所にある食堂（夜は飲み屋）である。そこで狭いテーブルについた、終始無言のクルド君にひたすら頭を下げ続ける私。

店内は昼時から騒がしく込み合うお陰でそんなに目立ちはしない。

「何度も言いましたよね、僕は行かないって」

「あー うん、言ってたねえ。」

わたしは相槌を打ちつつ近くにいたウエイトレスさん呼んだ。

「ガラシャさんは あの人、僕と同僚だった時からあんな人だったんですよ。ああいった状況じゃ間違いなくああなるのは分かってました。」

だから、だから言っただじやないですかっ！一緒に行かない って、僕の話聞いてますかっ！？

ナーガさんつつっ！」

「あつ ウン、モチロンキイテルヨー」

「あつてなんですか！あつて！

答えるまでの間の長さが全てを物語ってますけどっ！？  
その上棒読みっ！？」

ウエイトレスさんにオススメ聞きながら注文してたら流石にクルド君に突っ込まれた。

でもまあ注文は無事完了したので良しとしよう。

ガラシャさんという店主さんは紫髪紫瞳のファンキーな20代前半のお姉ちゃん、噂好きらしくクルド君にワタシとの事を根掘り葉掘り聞きまくっていた。

それを店員さんと服を眺めながら聞いていたワタシだが、取り敢えず全てスルーしていた。話しの矛先を此方に向けて欲しくは無かつたからだ。例え話を振られようと直ぐ様クルド君に丸投げした。

え？酷いつて？

いえいえ、大人の対応だつて言つて下さい。

「いやまあとにかくさ、お疲れさま。

今日はありがとうね？この服とかさ」

そう言つて着ている服の袖を引っ張った。

綿っぽい生地、服は織り目がやや粗いが、そんなに悪くはない着心地だった。逆に織り目が粗いからこそ通気性が良く涼しかった。こちら辺の服は膝下まである長い半纏の様な上着の中に、貫頭衣のシヤツを着込み腰帯で半纏を固定するという物だった。下半身は普通にパンツを履いてもいいし、ワンピースの上にその上着を羽織つてもいいそうだ。王都辺り迄行けば、又ちょっと違うらしい。この世界は郷土に合わせた服装をしているそうで、同じ国とは言え服装が違ふのは辺り前なのだそうだ。

因みにワタシが今着ているのは、パンツタイプである。色は全体的に目立たない淡い色合いにしてもらった。知らない場所でワザワザ動きづらく目立つ恰好をする程、ワタシは馬鹿ではない。

ワタシの素直なお礼に面喰らったのか、クルド君は「いえ」とだけ言うと押し黙った。

「さて、話を元に戻そうか」

「ナーガさんってマイペースですよ」

それまでの何とも言えない雰囲気はサクッとぶった切るかの如く話を進めるわたし。

クルド君はそんなわたしに脱力しきった身体と眼差しを向けた。

「は？マイペース？違う違う、ただ単にA K（あえて空気）Y（読まない読んでない）だけだから」

「マイペースよりタチが悪いですからソレツ！」

「大丈夫、人と場所は選んでるから」

「いや、選んでる時点である種空気読んでませんか？」

「ふおっふおっふお」

「ていうか人選んでる　って事は、僕ならA K Yでもいいって事なんですかっ！？ナーガさんっ！」

「もー、クルド君がさつきからわたしの話にチャチャ入るから、話が全く進まないじゃん」

「ええっっ！？無視された上に僕のせいなんですかつ？」

「それでさあ」

「又無視ですかっ！」

「この国の貨幣　通貨？価値が知りたいんだけど？」

「　　もういいです」

スンツと鼻をすする音が聞こえたり、クルド君の眼が潤んでいたのは気のせいだと思う事にした。

だって、ホントに話が進まんし。

「　通貨価値、ですか。そうですね、まず種類としては四種類あります。それぞれ下から銅貨、白銅貨、銀貨、金貨です。」

因みに、これはドコの国に行っても同じ物が使われていて、単位は全てナンで統一されていて」

「はっ！？まさか世界共通通貨なの？」

「えっ ええ、そうでないと不便じゃありませんか？」

何で驚くんですかと首を傾げるクルド君。

「いやまあそうだろうけど、ああいいや疑問は後で纏めて聞くわ」

続けてと言って先を促した。

「単位は銅貨4000枚で銀貨一枚

銀貨4枚で金貨一枚

銅貨には他に白銅貨といって一枚で銅貨100枚分のものがあります、実物見てみますか？」

「お願いします」

「ええ」とと呟きながら腰元辺りにくりつけていた革の小袋を取り出し、テーブルの上に中身をザラザラとあけた。

金銀銅の様々な色合いが混じっている。

「色で大体種類が分かると思うんですけど、この白銅貨と銀貨は色の区別がつきにくくなっていますんで気を付けて下さいね。

大きくて重いのが銀貨で、軽くてそれよりも小さいのが白銅貨です。なので硬貨は、大きくなるにつれて高価になるって憶えておけば大丈夫です」

何か言ってるけど、本人もきつと気付いてないからスルー決定。

ワタシは一円玉大のナン銅貨をつまみ上げた。

「あのさあ、この銅貨 1ナン？で何が変わる？」

「1ナン、ですか？」

確か、何も買えなかった様な気が」

宙に視線をさ迷わせながら答えてくれたクルド君に、ワタシは「ゴメン」と言って片手をヒラヒラと振った。

「聞く人間違えたわ」

「ひっ酷い！酷すぎですよナーガさんっつ！」

半泣きで叫ぶクルド君を内心「うるせえな」と思いつつ、「じゃあさ」と話を振った。

「この店のメニューってさ、平均的な価格設定なん？」

脇に置いたメニュー表らしき物をクルド君に渡した。

それは木簡に絵柄（恐らく料理の絵）が描かれ、その絵柄の下には数字が焼き付けされていた物だった。

木簡は上部に一つ孔が空けられており商品を注文する際はその木簡を店員に渡し数量を告げる、そして注文した商品が来たらその都度代金を支払う仕組みになっていた。

代金支払い時に木簡をテーブルに返すらしい。

そのせいかウエイトレスさんが歩く度にチャリチャリと、小銭が触れ合う音がしていた。

そこで物騒だな、と思うワタシは根性が捻れ曲がっているねだろうか。

いや、だってさあか弱い女の子が結構な大金持って目の前ウロウロしてるんだよ？

生活に困ってる奴だったら、くみ易しとひったくっちゃうでしょうよ、多分。

だから、この世界って実は結構平和なのかなあ　　なんて検討違いな事を思っていた。

「　　っあ　あのですね」

「うん、あの？」

随分長い時間考えてたなオイッ、と思いつつ優しく先を促す。

「分かりませんでした　「そんだけ考えて分からなかったんかいっ  
っ！」っイデッ!？」

スコーン!と軽い音をたて木簡が、クルド君の眉間にぶち当たり跳ね返った。

「だから言っただじゃん、聞く人間違えたってさ」

何も言えないクルド君は怨みがましい眼差しをワタシに向け、少々紅くなった眉間を静かに撫で擦っていた。

ワタシはそれをスルーし、木簡に視線を戻しているとフワッと食欲をそそる何とも良い匂いがしてきた。

キュルル、と控え目で奥ゆかしい腹の虫が鳴った。

「はゝいお待ちどうさまでー　って、お客さん！」

「はっはいつ!？」

何故かウエイトレスさんが焦った様子でワタシに声をかけてきた。ウエイトレスさんは周りを不安げに見渡し、数段声を落としてワタシ向かい囁いた。

「不用心よお客さん、そんな大金こんな見える所に広げてたら厄介事を引き起こしますよ?」

「あー　、それもそうだね。さっさとしまっよ、ありがとう」

やっぱり不用心だったかー、と呟きつつ忠告に従いクルド君に回収させた。

「それじゃお客さん、これがご注文のパンとデリア牛の煮込み。そしてこのサラダにはこのタレをかけてね、しめて 49 ナンになります。」

「ああはい、えー と どうぞ」

「はいどうも」

支払った小銭をポーチに入れるウエイトレスさんは、「それにしても」と言葉を続けた。

「こんな場末の食堂に、お客さんらみたいなお大尽様が来るなんてもお驚きですねえ」

呆れた様に続いた言葉に、これは常識を知るチャンスだと思った。

「場末ってそんな こんなに盛況なお店なのに」

「まあ安さと味が売りの店ですからねえ、デリア牛の煮込みをこの味で20ナンで出せる店はそうそうないですよ？」

「うんうん、そうだよねえ。その上パン2個で1ナンだっけ？」

ピタパンの様に平べったいパンを眺めホントに安いよねと呟けば、その通りだウエイトレスさんが頷いた。

「その辺の店ならパン1個で1ナンだなんていうけど、この店は儲け度外視だからねえ」

そう言ってカラカラと笑うウエイトレスさんに好感が持て、ワタシも微笑んだ。

ウェイトレスさんが立ち去った後、ワタシは机につつぶすクルド君を見下ろした。

「この店 激安なんだって」

ビクッ！

クルド君の肩が揺れた。

「１ナンで、普通ならパン１個買えるんだってさ」

ビクビクッ！

又々クルド君の肩が揺れた。

「クルド君って本当に まぁいいや、いただきます」

「ちょっと待って下さいっ！」「本当に」の次は一体何なんですかつ！？」

ホントウツセエなコイツと思いつつクルド君を横目に眺めた。

「言ってもいいの？」

言わないであげた折角のワタシの優しさ、無駄にしちゃうの？」

「アウウウ」

その場に泣き崩れてしまったクルド君。

トドメはワタシが刺してしまった様だ。

スルー決定なので然程気にせず、スプーンを手に取りいただきますと呟いた。

スパイシーなこの煮込みはカレーに近い味をしていても美味しかった。ピタパンモドキにタレをかけた野菜を挟みかぶりつく。ピリ辛なタレと葉物野菜の自然な甘さに、ハフウと感嘆の吐息を吐く。

やっと食べれたまともな物に幸福感が募った。

チラッとクルド君を見れば、もう回復してピタパンモドキを手にとる所だった。

ワタシはそれを生暖かい眼差しで見守りつつ、又食事へと意識を戻したのだった。

## 平凡女のお勉強（後書き）

\*\*\*\*\*

まだ次も似た様な感じでお買い物しますよ

多分。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2436m/>

---

平凡女の異世界譚

2011年8月28日01時50分発行